楽曲解説

9/15（金）第895回サントリー定期シリーズ

解説＝野本由紀夫

本日の演奏会について

東京フィルにとって、マーラーの交響曲第2番『復活』は運命的な作品である。このオーケストラの節目・節目で演奏してきたからである。合併まえの旧・東京フィルの最後の定期演奏会（2001年1月26日、指揮 沼尻竜典）の演目がこの曲だったし、同年4月1日に新星日本交響楽団と合併して「新生」東京フィルとなった最初の定期演奏会（6月15日・16日）も、マエストロ・チョン・ミョンフンの指揮するこの交響曲でスタートした。

また、5年目の2006年も、当時31歳のダニエル・ハーディングによってシーズンが開始され（4月6日）、10年目を迎えた2010年も常任指揮者に就任したばかりのダン・エッティンガーによる定期演奏会（4月4日）であった。その年は、マーラーの「生誕150年」でもあった。

マエストロ・チョン・ミョンフンとは実に16年ぶりの『復活』である。本日の演奏会は、さらなる時代へと進む歴史的一夜になるだろう。

マーラー（1860-1911）

交響曲第2番 ハ短調『復活』（国際マーラー協会全集版）

マーラーが完成した「最初」の交響曲。この第2番を書き上げた1894年の時点では、第1番はまだ5楽章の「交響詩」だった。声楽を取り入れた点でも、第2番『復活』はマーラーにとって大きな転機となった作品といえる。

●作曲の経緯

交響曲第2番は、「生と死」がテーマである。しかし、この構想が交響曲として形をなすまでには、紆余曲折があった。

もともと第1楽章は、28歳のとき、交響詩『葬礼』として完成された（1888年1月末ごろ作曲を開始、9月10日にプラハで浄書が完成）。当初、これのみ単独で出版しようとしたが、失敗。

1891年3月にハンブルク市立劇場の首席指揮者になったマーラーは、かねてより尊敬していたハンブルク在住の名指揮者、ハンス・フォン・ビューロー（1830-1894）に、『葬礼』をピアノで弾いて、聴いてもらう。しかし、反応は否定的。まだブラームス（1833-1897）が生きていたころの話だから、マーラーの音楽はビューローにとって、けた外れに革新的すぎたのだろう。こうして、『葬礼』をめぐる作曲は、しばらくストップしてしまう。

1893年、マーラーはもう一度、交響曲としてこの曲に取り組み直し、他の楽章の作曲も進める。ところが、合唱を導入しようと考えていた終楽章で行き詰まってしまう。ふさわしい歌詞

が見つからないのだ。その解決策を与えたのは、皮肉にも、またビューロー絡みであった。

1894年2月12日、ビューローは療養先のカイロで客死。3月29日、ハンブルクにおける彼の葬儀に参列したマーラーは、そこでドイツの宗教詩人、フリートリヒ・ゴットリープ・クロプシュトック（1724-1803）の作詞による賛歌『復活』を耳にした。マーラーに電撃が走った。この霊感を、彼自身「聖なる受胎」と呼んでいる。こうしてビューローの葬儀を機に、クロプシュトックの詩を最終楽章に用いることにしたのであった。交響曲第2番『復活』は、同年6月に全曲が完成した。

『復活』交響曲は、葬送行進曲である第1楽章で「英雄の死」を扱い、その解決が第5楽章「復活」でもたらされる。この大きなワク構造にはさまれた3つの中間楽章は、マーラー自身が「間奏曲」と述べている。各楽章について、彼は標題（＝音楽経過の解説文）をさまざまな手紙のなかで述べているので、以下の楽章解説の部分でも触れよう。

全曲の初演は、1895年12月13日、作曲者自身の指揮、ベルリン・フィルの演奏で行われ、大成功を収めた。こうした業績を経て、マーラーがウィーン宮廷歌劇場の首席指揮者に就任するのは、2年後のことである。

第1楽章　巨大なソナタ形式の楽章。英雄の葬列の音楽である。マーラーによると、この英雄とは交響曲第1番『巨人』における英雄であるという。

この楽章は、死によってもたらされる「生の意味付け」にたいする問いが扱われている。「この世の生とは何か？　死とは？　われわれに不滅は存在するのか？　こうした生、こうした死にはどんな意味があるのか？」（マーラー）。これにたいする回答が、最終楽章で与えられることになる。第1楽章の終了後、スコアには「少なくとも5分間の休みをおくこと」と記入されている。

第2楽章　交響曲全体のなかでは、「倒れた英雄の生涯からのエピソード」部分に相当する。「愛する故人の幸福なひととき」、「汚れのない太陽の光」、「無垢への悲しい回想」（マーラー）である。A主題とB主題の2つの主題を変奏する楽章で、Aは弦楽器だけによる柔和な音楽、Bは3連符の連続する、動きのある音楽となっている。

第3楽章　スケルツォに相当する楽章。ここから最終楽章まで、**約50分間、途切れずに演奏**される。第3楽章の内容は、「懐疑と否定の精霊が彼に取り憑き、混乱した幻影を見る。すべての存在と生命に対する嫌悪が彼を捉え、彼は絶望の悲鳴を上げる」（マーラー）というもの。

第4楽章『原光』　わずか68小節の、アルト独唱による短い楽章。歌曲集『子どもの不思議な角笛』のなかの、『原光』にもとづく。原光Urlichtとは、神に与えられた「おおもとの光」という意味。「神から生まれた私は、再び神のもとへと行く。神は私にひとつの光を与えてくれ、永遠の喜びの生命にまで照らしてくれるだろう」（歌詞大意）。

第5楽章　約30分もかかる長大な楽章。**合唱は、最後の10分**にようやく出番となる。

「破局」を表す、すさまじい不協和音とともに楽章が開始されると、やがて舞台裏のホルンが聴こえてくる。そこが最後の審判のラッパを表す**「荒野で叫ぶ者Der Rufer in der Wüste」**（『ヨハネ伝』）の部分である。

この楽章は、第1楽章における「生きるとはなにか？」にたいする答えである。それを音楽的に読み解くひとつのカギは、歌詞の「第6節」の音楽だと思う。この楽章は「第6節」の音楽、すなわち**「永遠モティーフ」**に貫かれているからである。その歌詞は、他ならぬ「よみがえるために、私は死ぬ」なのである。これこそが、この交響曲の答えなのではなかろうか。ちなみにこの歌詞は、新約聖書の「コリント人への第一の手紙」第15章36節に由来するものと考えられる。

第6節で一大クライマックスが築き上げられると、オルガンまで加わって、そのまま第7節の「復活」の賛歌、つまり「永遠の生命」への賛歌が劇的に歌われる。「神の超越性」を示すかのように教会の鐘の鳴り響くなか、深い感動のうちに全曲が閉じられる。

［作曲年代］1888年1月～1894年12月18日　［初演］1895年12月13日、ベルリンにて
［楽器編成］フルート4（1～4番ピッコロ持ち替え）、オーボエ4（3、4番はイングリッシュ・ホルン持ち替え）、エス〔Es〕クラリネット2、クラリネット3（3番はバス・クラリネット持ち替え）、ファゴット4（3、4番はコントラファゴット持ち替え）、ホルン10、トランペット6、トロンボーン4、テューバ、ティンパニ2名（部分的に3名）、打楽器（大太鼓、小太鼓、トライアングル、シンバル、タム・タム2〔大・小〕、グロッケンシュピール、鐘3〔音程の定まらないもの〕、むち）、ハープ2、オルガン、弦楽5部、独唱（ソプラノ、アルト）、混声4部合唱
［舞台裏の楽器編成］ホルン4、トランペット4、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、トライアングル）

のもと・ゆきお（指揮・音楽学）／桐朋学園大学助教授を経て、玉川大学芸術学部教授。研究にもとづく世界初演のオーケストラ指揮者。NHKテレビ「名曲探偵アマデウス」「ららら♪クラシック」、Eテレ学校番組「おんがくブラボー」番組委員ほか。鑑賞教育理論の第一人者として、全国各地の講演に呼ばれている。